

荒木緑・小川政弘作 「海で」

効果音 (ホームルームのガヤ)

ナレーション ここ青春高校も明日から夏休みです。そのせいでしょうか。いつもより生徒たちの顔が生き生きして見えます。1年生の田島由美もその中の一人です。帰り道での、友人伊藤幸子との会話にも、いつもけだるさはみじんもありません。

伊藤幸子 あー、“やっと自由になれた”って感じね。高校に入ってまだ3か月ぐらいだけど、とにかく疲れちゃった。朝は起きるの早いし、授業は厳しいし。

田島由美 ほんとほんと。ねえ幸子、あなたはどうするの？

幸子 うん、今考えてるとこ。どう？ うちによって「夏休みの有意義な過ごし方」とやらを考えましようよ。そうね、山本君や岡田君も呼んだら楽しくなると思うわ。

ナレーション 冷房のよく効いている幸子の部屋で、4人は地図を広げたり、雑誌を見たりしています。

山本 おれ、高校野球を見に行きたいな。

由美 わたしは海。

岡田 僕は山。

幸子 もうみんな勝手なこと言って。ではまず手始めに——。今度の日曜日、うちのお父さんが海に連れていってくれるって言うの。もちろん車よ。由美の意見もあることだし、どう、よかったら？

山本 へえー、話せる〜。感謝感激雨あられ。

岡田 僕、山も好きだけど、海も好きです。

幸子 よかった。由美、よかったね。

由美 ……。

幸子 どうしたの、由美？ うれしくないの？

由美 わたし、ダメ。行けない。

幸子 エー、どうして？

由美 日曜日は教会に行かなきゃ。

幸子 へー、由美、クリスチャンなの？

由美 そういうわけじゃないんだけど。

ナレーション 由美の家はクリスチャンホームでした。小さいころから両親に連れられて、日曜日は毎週教会に行っていたのです。といっても、彼女はキリスト教を信仰しているわけではありません。ただ“日曜日は教会に行く”というのが彼女の習慣だったのです。

山本 教会に行って、いったい何をするんだ？

由美 青書の話の聞いたり、賛美歌 歌ったり、祈ったり、献金をしたり、それから…。

山本 なーんだ、それだけか。たったそんだけのために、海に行かないって言うのか？

幸子 教会はなくなるわけじゃないんでしょ？ 1回くらい行かなくたって。由美、あなた「今年の夏は大いに遊ぶ」って誓ったんじゃないの？

由美 うん。そりゃそうだけど…。

幸子 だったらいいじゃない。教会には2学期になってからでも行くといいわ。大体んえ、教会なんて、もっと年取ってからでいいのよ。宗教に頼るなんて、現代の若者がすることじゃないな。

由美(モノローグ) あ〜あ、どうしよう。迷っちゃうなあ。「大いに遊ぶ」って言った手前、行こうかな。夏休みくらい休んだって構わない。礼拝なんて…。

幸子 ねえ、由美ったら。

山本 神様ってそんなに意地悪じゃないんだろ？ 大丈夫だよ。

由美 そうよね。行くことにする。だって3年になったらまた勉強でしょ。教会はいつでも行けるし。

岡田 僕もそう思います。

幸子 これで決まりね。

ナレーション 家に帰った由美は、夕食の時、思い切って両親に、海へ行く計画を話しました。怒られるだろうと思い、内心ビクビクしながら話し終えた由美に――。

父 まあ、これまで勉強、勉強だったし、この夏、思いっきり遊びたい由美の気持ちは分かるよ。ただね、日曜日に教会に行くっていうのは、単なるクリスチャンの週間とか、あるいは人から強制されてとかいうんじゃないんだよ。ま、一言で言えば、その人と、神様との人格的な結びつきの問題なんだな。まだはっきりとイエス様を信じていない由美にとっては、まだよく分からないかもしれないがね。お母さんとわたしがいつも祈っていることは、お前が一日も早くイエス様を信じて、自分から喜んで教会に行くようになることだ。今度のことは、お父さんは何も言わない。よく祈って自分で決めなさい。

ナレーション 由美は、なんだか突き放されたような気分でした。そして、今まであまり深く考えたこともない、いろいろな疑問が浮かんでくるのでした。

由美(モノローグ) (エコー) わたしはなんのために教会に行ってるんだらう？ イエス様を信じることと、教会へ行くこととどんな関係があるんだらう？ イエス様を信ずるって、どういうこと？

ナレーション 迷いに迷ったまま、由美はやっぱり友達と海に行くことにしました。あの真っ青な海原、白く碎ける波、潮の香りの誘惑には勝てなかったのです。

効果音 (車が停車する音)

幸子 こんにちは。由美、いる？

由美 あ、幸子。今行く！

岡田 ヨ、由美。
山本 お早う。さ、これでそろった。行こうぜ。出発！
効果音 (車の発車音)
ナレーション こうして4人を乗せた幸子のお父さんの運転する車は、一路白浜海岸へと走り
ました。
効果音 (波の音)
音楽 (軽快な音楽)
山本 ヒャッホー！ 海だ海だあー！
岡田 ウァー、スゲえ人だぜ。
由美 ほーんと。まるで人の中に海があるみたい。
幸子 ねえお父さん、ポーと借りて沖へ出ましようよう。
幸子の父 そうだな。それじゃそうするか。
幸子 ウァー、岡田君、山本君、一緒に来て！
ナレーション 4人はもうすっかり有頂天でした。人込みをかき分けかき分け少しずつ沖へ出
ると、オールをこぐ手にも俄然力が入りました。青い青い海。まっ白い入道雲
の浮かんだ空。人々の姿が次第に遠くなります。
山本 おっ、あそこに岩があるぜ。あそこまでやろう！
由美 待って。わたし泳いでく。
岡田 大丈夫か、由美？かなりあるぜ。
由美 平気。中学の時は水泳部だったのよ。どちらが早いか競走よ！
ナレーション 言うなり由美は海に飛び込み、遠くの岩まで泳ぎだしました。かなりのスピード
で水を切り、ボートを引き離して岩まであと十数メートルの所まで来ました。と
ころが、潮の流れのせいか、水が急に冷たくなりました。すると、彼女の足に
突然鋭い痛みが走って、動かなくなってしまったのです。
由美 あ、足が、足が！ ど、どうしよう。
効果音 (水をジャブジャブ蹴ってもがく音)
ナレーション 突然、彼女の心に、ぞっとするような恐怖が襲いました。
由美(モノローグ) 死、死ぬわ！（アップアップ苦しげにうめく。）
由美 イエス様、助けて！
ナレーション 口からも鼻からも容赦なく塩水が流れ込んできます。息が止まりそうに苦しく
なって、由美は思わず叫びました。その時――。
主イエスの声 (エコー)わたしだ。恐れることはない。信じなさい。わたしを信じなさい。
ナレーション 由美は、確かに声を聞いたように思いました。
由美 あ、イエス様だ…。
ナレーション そのまま由美は、何も分からなくなりました。
音楽 (ブリッジ)

父 由美、由美！

由美 あ、お父さん…。ここはどこ？ わたし、死んだんじゃないの？

父 ここは病院だ。そう、由美は一度死んで生き返ったんだよ。お前が沈む寸前に、岡田君たちが見つけて、潜って岩に引き上げ、人工呼吸をして、息を吹き返してから、救急車でここに運ばれたんだ。意識が戻らなくて心配していたところだ。よかったなあ、由美。

由美 お父さん、日曜日に教会に行かなかった、神様の罰ね。わたし、イエス様に会ったの。

ナレーション 由美は、あの意識を失う瞬間の出来事を一部始終話しました。

父 ——そうか。そういうことがあったのか。うん、今の由美には分かるかもしれないね。イエス様が水の中からお前を救い出してくださったように、イエス様は由美を罪から救い出してくださるために、命を捨てられたんだ。ご自分の一番大切なもの、命をだ。分かるね？ そして3日目によみがえってくださった。それが、日曜日、“主の日”なんだ。イエス様が、このわたしのために命を捨ててくださった。その愛が本当に分かったら、どんなにやりたいことがあっても、種の日をイエス様にささげて、心から神様を礼拝して、神様のために過ごすのが、本当のクリスチャンの生き方じゃないかな。

ナレーション 由美は、父の語る言葉の意味をかみしめながら、心の中に、イエス様に在る新しい自分が生まれてくるのを感じていました——。

<完>